慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働科学の出発点 : 能率問題に対する一批評
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.5 (1928. 5) ,p.667(81)- 686(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19280501-0081
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280501-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その中にはキャラコも印度絹も含んでゐた。東印度會社はキャラコはリンネルにあらずとして故障を申出たが、當局はこれを認めなかつた。そこでその後キャラコは一反について九片から三志の稅を拂はされた。勿論それでも東印度會社はキャラコの原價が安かつたから相當の利益を擧げることは出來た。かつ印度品は前述の如く、一般に好まれてゐたから、この關稅は殆ど保護の役はなさなかつた。

然るに一六八五年さらに議會はすべての東印度から齎されるキャラコ、印度リンネル、絹、その他の織物に從價稅一割の附加稅を承認した。この課稅の目的は一方ジェムス二世のモンマウス侯に對する戰費を撚出するにあつたが、主としては國內織物業の保護にあつたことは疑ひ得ない。この課稅は一六九〇年までの筈であつたが、その時になつても廢止されず、却つてこれを確定し、さらに倍加した。

かくの如く幾度もの課稅に依つて、印度キャラコや絹の使用は幾分か減退はしたが、本來これ等の生產費が安價であるため、容易に稅金を撚出し得、すでに上述したる如く、他の事情に依つて減退はしたが、依然として輸入されてゐたのである。即ち今吾人が問題としてゐる第十七世紀後半に於いては、印度產織物が多額に英國に流入されてゐた時代である。この問題が如何に解決されたか又印度に流出する金銀に對する問題の如きは、さらに後期に於いて論ぜらるべき問題である。

（昭和三年四月二十三日稿）

勞働科學の出發點

——能率問題に對する一批評——

藤林敬三

一

十九世紀は機械學の時代であり、二十世紀は心理學の時代である。前世紀は吾々の物質界に對する知識と其れを吾々の目的に役立たしめ得る吾々の力とに於て異常なる發達を示した。之れに對して今世紀は恐らく人間性に關する吾々の知識と其れを吾々の福祉のために利用する吾々の力とに於て同等の發展を示すであらう。生產上に於ける機械の發明改良が、過去の經濟生活に異常なる變化を齎したと同じく、生產上の人的要素に關する吾々の新しき知識と其の應用とは未來の經濟生活に對して顯著なる變化を齎すに充分であるとは屢〻心理學者の口にする所である。蓋し過去の產業活動に於て世の多く注意を惹きし所は主として生產上の物的手段に關し、其の人的要素に關する考慮は不幸にも顧みらるゝこと少なくして過ぎた。然かも最近時に於ける能率問題の考究は、生產に於て最後に最も重要なるものが機械ではなくして機械を利用する人間にあることを明かにした。然らばかく考へられたる人間の活動を左右するものは何であるか。此處に能率問題は生產上の人的要素に關する心理學的若しくは生理學的研究の必要を認むるに至つた。私は此の新方面の心理學的諸研

究から生れたる、若しくは、嚴密には、將に生れんとする科學に對して勞働科學なる名稱を採用する。

勞働科學の發達に對して直接大なる刺戟を與へたるものが、米國に端を發したる科學的管理法であることは何人も既に熟知の事柄である。而して夙に心理學の實際生活の諸方面への應用を企圖したる H. Münsterberg は Taylor 一派の實際作業の研究から、或は又 Boston に於ける F. Parsons の職業指導の運動から價値ある部分の暗示を受け、是等二つの運動が、未だ心理學的に確固たる認識に基かざる處に、彼自ら出でゝ經濟生活に對する心理學の應用の可能なると其の有用なるとを力說した。此の點に於ける彼の最初の著作である Psychologie und Wirtschaftsleben, ein Beitrag zur angewandten Experimental=Psychologie, 1912. の序文を讀むものは、當時如何に此の方面に於ける努力が心理學者に依つて顧みらるゝこと少なかりしかを知ると同時に、何人も彼を以て應用心理學の一部門としての勞働科學の創說者となすに躊躇しないであらう。私は今此處に彼の勞働科學上の研究の價値に就いて云々する必要はないが、唯だ彼以後未だ二十年を經ざる今日此の方面の諸研究が彼に比して甚しく愼重に且つ精密に行はれつゝあること而して其の研究の發展の著しきものあることを附言すれば足る。這般の世界大戰は交戰諸國をして戰時經濟の異常時に際して產業上の諸種の生產勞働に對する心理學者並に生理學者の研究の重要を認めしめること大であつた。而して此れより以後十年間今や公私の研究所は各國に設立せられ、學者の興味は素より實際家の期待も亦此の新方面に對する開拓に多大の刺戟を與へつゝある。かくて各國に於ける勞働科學上の斷片的諸研究は著々進步し、又同時に最近漸く學者の注意は是等個々の斷片的研究の相互關聯せる意義を認め、是等の諸研究を綜括し、是れに一つの體系を附與し以て應用心理學の一部門としての勞働科學を確立せんとする方向に向ひつゝある。

既に勞働科學の發達に於て吾々の觀るが如く、其の諸研究は素より特に產業上の或る種の實際的目的を目標として其の目的達成のための科學的基礎の發見の努力として現はれて來たことは明かである。而して勞働科學が應用心理學の一部門なりと見做さるゝ場合には、其れは他の應用諸學と同じく、吾々の生活に於ける何等かの理想目的の實現を可能ならしむるために必要なる科學的知識を供給するものでなければならぬ。然かも吾々は勞働科學の發達のために、勞働科學と其の實際的應用とを嚴格に區別することが必要である。(1) 勿論勞働科學の發達はその個々の研究の實際的應用と互に相俟つて可能であるが、然かも是等の諸研究が總て直接實際上の目的の實現を何の程度迄充分に且つ正確に齎し得るかに關しては尙ほ吾々の研究の足らざる所多分である。其れにも拘らず其の實際的應用は必ずしも勞働科學の完成を俟つことを必要とせず、多少とも實際的効果を生ぜしめ得るの豫測あれば勞働科學上の研究は實際に應用せられて差支へない。之れに對して勞働科學は先づ事實に對する精密なる科學的理法の確證に達せんことを主眼とするものである。然かも尙ほ吾々は勞働科學が理論的の研究に沒頭し、應用とは區別せらるべきものであるとするも、常に勞働科學は一つの應用科學であることを忘れてはならぬ。更に又勞働科學上の研究の結果望ましとせられたる所も實際の應用に際しては時には其の實施が經濟上其の他の方面から抑制せられ、妨害せらるゝこ

とあるは明かであつて、從つて其の研究者は一方事實に對する科學的理論的研究をなすと同時に、他方本來其の研究に課せられたる目的に從つて諸原理を樹立するに止まらねばならぬのは蓋し止むを得ざる所である。

然らば應用心理學の一部門としての勞働科學は如何なる目的を有するか。此の點に就いて吾々が明確なる目標を得ることは軈て勞働科學の研究の範圍を限定し、其の方法を確定し得る所以であつて、又同時に其れは勞働科學の體系化への第一歩である。從來勞働科學上の諸研究が組織的に綜合せられたる場合に、此れに附與せられたる名稱必ずしも一致せず、又同一名稱の下に包括せらるゝ諸研究は時には雜然として系統を欠き、或は又學者に依つて其の研究の範圍必ずしも一定してはゐない。勿論一定の目的に對して有効なる限り、勞働科學上の諸研究が如何なる組織系統を與へらるゝも何れ大差なきものの如く考へらるゝやも知れないが、實際の應用から離れて暫らく科學の發達を考ふる時此のことは確かに重要なる問題である。然らば勞働科學は如何なる體系を有してゐるか。此の問題に先んじて私は從來の勞働科學上の諸研究を指導し來れる目的そのものに對して大なる疑問を有してゐる。されば本論に於ては主として此の點に關して些か從前の見解を檢討して見度いと思ふ。而して其れは勞働科學の出發點に關する私の貧弱なる吟味である。

(1) 松本博士、人間工學（心理研究第百號三三四頁）

二

勞働科學は一個の應用心理學である。其れは一定の目的に從つて其の目的の實現を可能ならしめんがために生產上の人間勞働に關する應用心理學的研究から成る。然らば勞働科學は如何なる目的を有するか。凡そ今日に至る迄勞働科學上の諸研究に附與せられたる直接の目的は先づ勞働能率の增進と云ふ點に存すると見て大過なきものゝ如くである。例へば吾國に於て「人間工學は心理學的研究を基礎として人間力を利用する原理を組織立てるものである。從來の語をかりていへば、人間能率の增進に對する原理の研究である」(1)と觀らるゝが如き是れである。かく勞働科學の目的が今日尙ほ人間能率の增進にあると見らるゝ所以は勞働科學の發達に最も大なる刺戟を與へたるものが、科學的管理法であることを知るものに取つては容易に首肯し得る所である。

然らば心理學者は如何にして斯くの如き目的を採用するか。此の點に關して H. Münsterberg の屢〻敎へる所に從へば、應用心理學者の持つ一切の心理學上の知識は彼に對しては常に一つの與へられたる目的の達成に役立つ手段の洞察のみを許し得るに過ぎない。而して彼の有する心理學上の知識其のものが、達成せらるべき目的自體を決定し得ない。即ち心理學上の知識は常に唯だ「吾々が此の目的を欲するならば此の道を採らざるべからず」と云ふことを示し得るに過ぎないと云ふにある。(2) 斯くの如き見解に從へば、結局勞働科學の研究者は自ら直接分業の發展が一個の理想たり得るや否や、機械器具其の他生產上の物的手段の改良が如何なる方向に於てなさるゝを以て望ましとするや否や、或は又勞働者の作業に於ける勞力を節約し、勞働能率を增進し、更に又勞働者の人格を發展せしむることがより可いことであるか否かを問ふ必要はない。勞働科學の研究者は本來是等一切の價値判斷から解放せられてゐる。而して是等の價値判斷を可能ならしめる終局の目的は彼に

對しては外部から與へられる。彼は唯だ此の與へられたる目的に從つて其の達成の方途を科學的に探及するの任務を有するのみである。「職業の單調と種類、機械の速度と喧騒、出來高拂、日給、殘業、疲勞と休憩、激怒と好意、其の他勞働者に影響して彼の注意を惹く多樣の諸要因、是等の人間能率に對する關係を考慮するに當つて心理學者の目的は科學的でなければならぬ。即ち彼は事實を蒐集し、其れを整へ而して其れを説明せんと試みねばならぬ。」(3)

H. Münsterberg に限らず、從來の勞働科學の研究者達が殆んど無批判的に勞働能率の增進を以て勞働科學の目的なりとするは恐らくは斯くの如き見解に基くものであらう。彼等には生產勞働に關して如何なる目的が正しきか、將た望ましきかは問題でなく、今日の產業界が勞働者の勞働に對して何物を要求しつゝあるかを知るを以て足るのである。

乍然、今日勞働科學の研究者達が、何人も彼等自ら解する所に於ては、勞働能率の增進と云ふことは單に資本家の營利のためのみの目的でもなければ、又勞働者のみに有利なる結果を齎すものでもない。「社會全體の見地から見れば、產業の目的は文明人の生活狀態が要求する物財を出來る丈け最も經濟的な方法に於て供給するにある。更に雇主と被傭者たるとを問はず社會員中產業に從事するものから見れば、產業の目的は可及的小なる浪費を以て其の仕事を爲し、彼等に對して可及的大なる收益を齎らすにある。」「若し產業過程に於て費さるべき人間の精力の量が一定なりと假定すれば、產業心理學は其れから最大の生產を得るやう心理學を應用する試みである。乍然、若し生產の量にして固定してゐるとすれば、……產業心理學の直接の目的は人間の精力の最小支出から固定量の生產を得るやう心理學を應用する試みである。」(4)

勞働能率の增進はかくて一般に勞働科學に附與せられたる目的であると見做され、而して右の如き見解が之れに對して心理學者の抱懷する期待である。乍然、勞働科學の直接目的が勞働能率の增進にあると見做されることが、果して妥當であるか否か。斯くの如き見解は生產上の人的要素に關する如何なる見解に基くか。

(1) 田中博士著、人間工學（五版）一―二頁
(2) H. Münsterberg, Grundzüge der Psychotechnik, 1914. S. 39.
(3) F. Watts, An Introduction to the Psychological Problems of Industry, 1921. p. 16.
(4) B. Muscio, Lectures on Industrial Psychology, 1917. p. 26. p. 35.

三

既に經濟學者の敎ゆるが如く、資本主義の最も暗黑なる一面は雇傭勞働に依る人間の奴隷化である。勞働者は社會上資本家に隷屬し、更に彼等は工場内に於て機械に依つて拘束せられる。資本家雇主に取つては勞働は一個の商品であり、勞働者は生產上自ら活動力を補供する一個の機械に過ぎない。勞働能率增進の要求は人間の勞働から一定の效果を得んがために最小の勞力を以てするか、或は一定の勞力を以て最大の效果を得んとする所謂經濟の本則の適用に過ぎない。其れは從來機械の改良に對して適用されたると同じ方法を人間に迄擴大したものである。機械に對して最高能率（標準能率）を期待すると同じく、資本家雇主は今や勞働者に對して最高能率の實現を要求する。かくて勞

働者の能率は生産上機械其の他の物的材料の能率と全く同じ意味に於て觀察せられ、勞働者は一個の生産手段として雇主の利益のために研究の對象となる。(1) 洵に「能率增進の理想としては、不必要なる一切の手數を芟除し、總べての冗費を省略し、所謂最小の勞力を以て、最大の結果を擧ぐることに存する。即ち製造工業に於ける能率增進とは最小の費用を以て、一定時間に品質最も優良なる物品を、永續的に最も多量に製造し、生産原價を最小限度に低減すると共に、企業利潤をして、最大限度に增大せしむることを眼目とし理想とするのである。」(2)

素より勞働能率の增進は如何なる經濟組織の下にあつても社會全體のために望ましき事實であり又大いに重要なる事柄である。乍然、其れは其れ自體吾々の生活に對して唯一普遍の最高目的でもなく、社會の發展に對する終局の目標でもなく、寧ろ其れは人間文化發展の終局目的からすれば單なる一つの手段に過ぎない。然かも資本主義の下に於てはかくの如き手段が揚げて目的なりと觀せられ、加之、之れがために却つて遙かに重要なる人間の目的が輕視せられてゐる。然かも吾々は人間の社會生活の發展のために、人間の勞働は決して經濟財ではないと云ふ認識を確然と保持せなければならぬ。(3)

勞働能率の研究に際して生理學者が人間を以て一個の機械なりと見做すは暫く惜いて問はずとするも、(4) 心理學者も亦人間を以て一個の機械なりと見做す。Münsterberg が人と人との關係は、第一には意志と意志との關係であり而して人をば一個の主觀と見る關係であるが、第二には他人をば單なる心的機構とも見做し得ると云ひ。吾々が他人をば一個の自己と解することなく、原因結果の關係に於ける自然事象の連鎖であると見、吾々が利用し若しくは影響を與へ得る一個の手段なりと見る場合に於て初めて吾々は技術的、因果的なる心理學的觀察に到達し得る。而して吾々が人間の精神生活の客觀的因果的見方ではなく、主觀的、有目的的なる見方に依りて支配せらるゝや否や應用心理學は問題たり得ず、精神工學は事實此の點に於て重要なる一限界を見出すと述べてゐる(6)が、今日我國に於ける心理學者も亦人間をば一個の力と見做し、此の人間力の性質は如何なるものであるか、又此力を最も有効に使用する方法は如何と云ふ問題の解決を主眼として勞働科學上の研究に從事しつゝある。(6) 乍然、私は此等の見解に於ては一つの重大なる點の看過され居るにあらざるやを疑ふ。即ち是等の見解に於ては正確科學の方法其れ自體が應用科學に課せられたる、若しくは課せらるべき目的を無意識の内に制限してゐるか或は放棄して顧みることを不可能たらしめてゐる。自然科學的なる正確科學の方法を採用する勞働科學が尙ほ人間を以て一個の人格なりと認め、此處から勞働科學の目的を拉し來り或は與へられることが果して不可能であらうか。矢張り吾々は人間を以て一個の手段と見なければならぬのであらうか。更に又勞働科學に於て人間を一個の機械であり、單に一つの力であると見做すことが其の科學的研究をして果たして能く現實事實の眞相を明かならしめ得る所以であらうか。

從來の能率問題が勞働者側の不信を買つた一部の理由が此の點に存することは何人も容易に首肯し得る所であらう。然かも此の點に於ては既に私の紹介したるが如く、英國の産業心理學者は能率問題に對して米國的臭味を直ちに是認することが出來なかつたのである。「英國の産業心理學者は勞

働者と共に生産に應用せられたる科學が人間を支配すべきものではなく人間の從僕たるべきものなることを是認する。」(7)既に斯くの如き見解は今日唯だ資本家の盲目的なる營利衝動に無批判的に追隨する能率問題の考究者をして自ら反省せしむるの一部の効果を持つことは確かである。

其は兎も角吾々は生産上の人的要素を目して一個の機械なりと見做し、或は一個の力なりと見做す見解の當否を考へて見なければならぬ。

人間を目して一個の力であると見做し得るならば、「集團的人間力を考へるのに、個人を單位とする人間力の集合と觀」(8)得るのは當然である。若し勞働科學上の研究が抽象的理論的研究を以て甘んぜられ、乃至は實驗室内に於ける心理學的研究を以て足れりと見做さるゝ場合には、正に右の如き見解も亦妥當である。乍然、勞働科學が一個の應用心理學として存する場合には、斯くの如き抽象的研究にのみ滿足し得ないのは明かである。勿論今日の應用心理學が H. Münsterberg の云ふ因果心理學に關係せるものであることは明かであるが、然かも彼の云ふ因果心理學は單に個人心理學のみを含むものではない。人間を目して一個の力であると見る心理學者が多く個人の單獨行爲を研究の對象となし、心理學的には實驗的に、比較的に、更に生理學的研究を考慮することに依つて個人の行動を研究するのであるが、乍然、此の種の研究者と雖も一度實驗室から出でゝ工場に於ける勞働者の實際作業を觀察する場合には必ずや次ぎの事實を認めなければならぬ。即ち例へば、多數の勞働者が集團的に作業に從事する處に於ては、時には彼等の間の競爭意識が、時には彼等の共同努力の意識が、又時には彼等の階級的な集團心理が各々彼等の生産能力に對して特別の原因をなし從つて此場合吾々は直ちに「集團的人間力」が「個人を單位とする人間力の集合」であるとは見得ないのである。人間を簡單に機械視し得ないのは單に此の事實を以てしても明かである。されば吾々が事實の眞相を科學的に明瞭ならしめんとするならば、吾々は常に「勞働者各人が全く物質的諸條件に基く一個の機械ではなく、彼は合理的な又時には不合理的な人間である」(9)と云ふことを先づ知らねばならぬ。

右の如き見解に比較すれば P. S. Florence が人間力 man-power なる語の代りに人的要素 human-factor なる語を採用せるは遙かに愼重であると云はねばならぬ。彼に從へば、人的要素は單に多數者を附加することに依りて增加され得るものではない。而して人的要素に關して問題なりと見做さるゝ點は一定數の勞働者の生産能力と彼等が甘んじて生産に從事するか否かの程度とである。前者に關する主要なる要因は作業に伴ふ疲勞と練習効果の有無とであり、後者の程度は勞働者の受くる精神的疲勞、倦怠、作業の單調、仕事に對する興味、關心の程度の大小如何に懸つてゐる。(10) P. S. Florence のかくの如き見解は又勞働者個人が機械以上のものであることを示すに足る。更に A. T. Poffenberger の能率に關する見解に從へば、人間能率の理想は最短時間内に最高品質を有する生産物の最大量の生産を得るに精力の最小支出を以てし、且つ滿足の最大量を以てするにある。而して之れに次いで彼の附言する所に聞けば、從來管理者側は生産高の數量の品質との增進を重視し、之れに對して勞働者側は精力支出の減少を力説した。然かも何人も少くとも意識的に、仕事から生ずる滿足に對しては其れが能率概念中に考慮せらるゝに足るの重要を附加したるものなしと。而して彼

の云ふ能率の此の三面は互に相關聯し、其の一つに影響する狀態は又他のものにも影響する。然かも心理學的見地からすれば、此の能率の三面を個別的に取扱ふことが可能であり、且つ其れは利益である。(11) 彼が從來の能率問題の考究者に對して殆んど全く考慮外に置かれたる一點、即ち作業から生ずる滿足に重要を認め、人間能率の理想の一面が、かくの如き滿足の最大量を生ぜしむるにあると見る點に於て、彼も亦正に人的要素に關する眞相の科學的な了解に於て人間を目して單なる手段なりと見做す偏狹なる見解から一歩を踏み出した觀がある。

(1) F. Wunderlich, Hugo Münsterbergs Bedeutung für die Nationalökonomie, 1920. S. 78.
(2) 勝田一著、工場管理　六頁、
(3) F. Wunderlich, S. 79.
(4) 暉峻博士譯、產業能率の研究　二―三頁、
(5) H. Münsterberg, Psychotechnik S. 38-9.
(6) 松本博士、人間工學（心理研究　第百號　三三三―三三四頁）
田中博士著　人間工學(五版)第一章
淡路圓次郎著　職業心理學　序文
(7) 本誌　第二十一卷第十號　一四九頁　拙稿參照
(8) 田中博士著　人間工學　七頁
(9) H. M. Vernon, Industrial Fatigue and Efficiency, 1921, p. 34
(10) P. S. Florence, Economics of Fatigue and Unrest, 1924, pp. 97-8.
(11) A. T. Poffenberger, Applied Psychology, its Principles and Methods, 1927. p. 352.

四

勞働能率增進の問題が今日の產業界にあつては資本家の要求する所であり、企業利潤の增大のために勞働者は宛かも一個の機械の如く觀せられ、機械能率の增進のために嘗つて物理化學が、此處に應用せられて著大なる効果を生みしと全く同じ意味に於て、今や心理學者は一個の技術學として の機械工學の例に倣はんとしてゐる。而して斯くの如き努力に於て極端なる論者は人間を目して一個の手段なりと云ふ見解から出發するが、乍然、私の見る所に於ては今日の勞働科學の研究者達は、若し彼等にして甚だ抽象的なる研究に甘んぜざる限り――而して其れは寧ろ今日多數の研究者に於て然うであるが――人的要素の科學的研究に於ては遙かに其の眞相を明かならしめ、從つて人間を手段視するの見解から脫却する方向に一歩を踏み出してゐる樣に思はれる。然かも不幸にして未だこの事は彼等の多くの者に取つては殆んど無意的進歩であり、彼等は依然多少の程度に於て勞働能率の增進の目的に追隨してゐる。乍然、勞働能率增進のために勞働者を手段と見做すことは明かに吾々の倫理的要求とは相容れない。既に英國の產業心理學者は科學が人間を支配すべきではなく人間の從僕たるべきことを要求したが、私は此の同じ要求を勞働科學に對して持つ。從來勞働科學の研究者達が其の科學的努力に對して時には精神工學又時には人間工學と云ひ、生產上の人的要素を目して人間機械、人間原動機、人間力と云ふが如き名稱をすら考へ出した如く、是等は明かに心理學若しくは生理學が自然科學的方法に於て人間の動作を研究し得るに至つた結果であつて未だ以て可とするも、其の科學的方法が勞働科學の目的に於て、尙ほ人間を目して一個の機械なりとし、

此れを手段視するに於ては研究者は正に超ゆべからざる所を超へたりと云ふ謗をまぬがれ得ないであらう。勞働科學の研究者が單に超ゆべからざる所を超へりと云ふに止まつて、尙ほよく正道を步み得たりとすれば、咎むべきは寧ろ些事に屬するであらう。然かも吾々が彼等に對して此の事を期待し得るのは、唯だ彼等の無意識的努力の內に於てのみである。

然らば勞働科學は勞働能率增進と云ふ目的の外に遙かに重要にして正しき目標を見出し得ないか。從來勞働科學の研究者は、經濟の本則に從つて、同一量の生產を得るに最小の勞力を以てし、或は同一の勞力を以て最大量の生產を得るを以て勞働の合理化であると見做し、能率增進の基本を此處に見出した。而して此處に見出されたる新しき方法は單に私經濟的立場から見て價値あるのみならず、更に國民經濟的觀點に於て價値あること明かである。而して此の事は既に幾度か工場制度の確立、機械力の利用以後の最大の進步であると見做された。誠に何人も其れが技術上の發展の最高點を劃したるものなることを否定し得ないであらう。乍然、能率の增進は單に經濟を通じてのみ吾々に取つて重要であり、社會生活の發展に關して吾々の考慮すべき事實であることを忘れてはならぬ。其れは吾々の社會生活の發展が究局目指す所の理想的目的に對しては單なる一つの方便に過ぎない。吾々の持つ究局目的の何たるかに關しては人の見る所必ずしも一致しないであらう。乍然、其れが人格の自由なる發展と完成とに結び付いてゐること丈けは確かである。然るにも拘らず、かくの如き目的に對する一つの方便を以て宛かも其れ自體目的であるかの如く觀じ、却つて人間を以て此の方便に對する手段と觀るに於ては其は正に本末を顚倒するの甚しきものである。

かくの如く見れば、勞働能率の增進が勞働科學成立の直接の目的たり得ざること明かであらう。然らば何處に勞働科學上の諸研究を指導すべき妥當なる目的が存在するか。私は勞働人格の自由なる發展と完成とのために、人間の社會生活に課せられたる避くべからざる生產勞働から、消極的には所謂勞働の苦痛を出來る丈け除去し、且つ積極的には勞働の喜悅を增發せんことを目的として心理學的研究に依りて價値ある方途を見出すのが勞働科學に課せられたる任務であると思ふ。吾國に於ける勞働科學の尊敬すべき研究者の一人である暉峻博士に依れば、「產業能率が科學的に考慮され出したこと及び、それに伴ふところの產業能率增進の諸制度の產業界への導入は、尙ほ、全然眞の產業的文化の高上を目的としてゐるものでもなければ、またこゝに活動する人間――勞働者――の眞の幸福を目的としてゐるものだとは考へられない。多くの場合それは最高生產の獲得を意味してゐるもので、科學の資本主義的利用に外ならないことが往々認められる。自分の信ずるところでは、產業能率の增進されるところ、必ずこれに關與する勞働者の苦痛、生命の犧牲が除去――少くとも輕減されねばならない。換言すれば、勞働者の生活から苦痛を輕減し、彼等の生命の犧牲の生活によりよき變革を與へることが、產業能率增進の考慮並に其の實行の一主要條件でなければならないのである。」(1) と。

既に英國の產業心理學者は能率增進の目的のために、却つて勞働者が實際作業に於て受くる疲勞に對する輕視を恐れ、勞働疲勞の減少こそ寧て能率の增進を來す所以であるとなし、吾國に於ても亦神田孝一氏の如きは、勞働科學の研究が能率問題に對して『如何にして能率を進むるか』の研究

より『如何にして能率が高まるか』の研究に移れるもの」(2) なりと見て居られるが、少くとも此等の見解に於て尙ほ勞働科學が直接勞働能率の增進を問題とする以前に更に重要なる第一義的研究分野の存することを示してゐる。勞働を眞に合理化せんが爲めに云ふ迄もなく勞働疲勞の問題は重要である。然かも更に一歩を進めて吾々は既に、生產上の人的要素に關しては消極的に又積極的に倦怠、仕事に對する興味、關心、作業に隨伴し或は其の結果生ずる滿足と云ふが如き主觀的狀態の存在を認め得る。勿論是等の主觀的狀態が吾々の科學的研究に於て果して充分なる表示に於て確定せられ得るや否やは疑問である。乍然、此の故に是等の狀態が吾々の考慮外に置かれることは許されない。例へば O. Lipmann は勞働の遊戯化の可能性に關する彼の見解に發して「作業の構成、勞働手段並に作業方法の選擇は出來る丈け多く之れを勞働者に委すべきであり、且つ此の原理は嚴密に基礎付けられたる經濟的考量に基いてのみ打破せらるべきである」と云ふ要求を示してゐる。(3)

勞働科學の研究者が眞に歩むべき道は從來能率增進の觀點の下に多く隱蔽せられてゐた。然かも近來吾々の眞の要求が甚だ微弱ではあるが勞働科學の研究者に漸く近きつゝあるの事實を認めねばならぬ。而して此の眞の勞働科學の目的は不幸にして多く從來の勞働科學の研究者達に依りて無意識の內に或は第二次的意義に於て彼等の科學的研究の裡を彷徨し來つたのである。されば今や吾々は從來の勞働科學に對して其の目的の顚倒を要求しなければならぬ。かくて私は勞働科學の目的に關聯して前揭暉峻博士の見解と共に F. Wunderlich の所言に對して多大の興味を覺えるものである。彼は云ふ。「技術の（勞働者に及ぼす）影響の吟味の外に、恐らくは勞働の喜悅を甚だ愉快なる印象に依りて增大せんとする方法に於て、勞働の精神化の目的のために科學的の且つ實驗的の諸研究が行はれ得るであらう。Taylor 一派（Taylorsystem）が心理學並に生理學の諸法則に從つて如何なる前提の下に、作業に於て最小の努力を以て最大の能率を得べきかを探及したると同じく、其れは又勞働力の保持並に勞働喜悅の增大に關する研究を爲し得るであらう。從來此の事は Taylor 一派に取つては實に間接の方法であつて、然かも自己目的ではなかつたのである。」(4) と。

(1) 暉峻博士譯　產業能率の研究　一—二頁（序文）
(2) 神田孝一著　勞働能率研究　一五頁
(3) O. Lipmann, Grundiss der Arbeitswissenschaft, 1926. S 13 u 14
(4) F. Wunderlich, S. 85.

五

最後に私は以上の論述を多少補ふ意味に於て再び私の所見を明かにして置き度いと思ふ。

『O. Lipmann は勞働科學を解して「人間勞働の諸條件と其の諸結果とに關する學問」であると云ふ。而して勞働科學の觀察の中心に來るものは常に勞働者であつて、其の研究の對象たる諸結果は種々なる勞働條件の下に生ずる勞働の結果若しくは其の隨伴現象であると述べてゐる(1) が、吾々は勞働科學の研究に當つて常に勞働者自身の研究と相對的に勞働の諸條件が勞働の結果に如何に表はれて來るか、從つて又勞働者に如何なる影響を與へるかを究めなければならぬ。

かくて吾々の考慮に於て第一に重要となり來るものは、現代の生產組織が勞働者に對して如何な

る勞働條件を提供し、又如何なる影響を勞働者の身心に及ぼしつゝあるかを見ることが必要である。近代產業の特徵は、其れを技術的に見れば、機械の利用と分業の發展とである。此の二つの方面が、勞働者の心身に及ぼす影響に關しては既に多く心理學者若しくは生理學者に依つて述べられてゐる。機械は人間の勞働力を節約すること甚だ大であるが、是れと同時に機械は往々にして勞働者各人の個性を無視して考案せられたる結果勞働者各人固有の作業速度又は律動と合致せず、是等の點に於て人間は却つて機械のために受動的勞働を余儀なくせられ、更に機械の前に立つて作業に從事する勞働者は機械のために異常なる注意力の緊張を強ひられる。かくの如き狀態が勞働疲勞發生の重要なる原因をなし、又勞働者の心的狀態に對して好しからざる影響を與ふることは特に吾々の注意せなければならない所である。勞働者は自己の個性と不調和なる狀態の下に常に機械に屬從せしめられる。其れは最早人間が機械を扱ふ狀態ではなくして、却つて宛かも機械が人間を働かす狀態である。

更に分業の發展は益〻勞働者各人の行ふ作業を單純化し、是れに從事する勞働者特に知能高きものに對しては倦怠を覺べしめること甚しく精神的疲勞を誘發するに至る。勿論分業の發展の結果單純化されたる作業の內のあるものは技術上人間から機械へ移されること益〻可能となり、機械は益〻精密複雜の度を加へつつ自動化されて行くことに依つて、此の問題の一部が緩和されて行くのは吾々が既に多くの精巧なる機械に就いて今日見得る所である。

然らば是等の問題に對して勞働科學の研究者は如何なる要求を有するか。人間を機械から解放しやうと云ふ要求は從來屢〻叫ばれた所であるが、今日は勞働科學上機械の人間への適應の重要が認められてゐる。既に初期の科學的管理法論者中には勞働者の作業上使用する簡單なる道具の改良に就いて見るべき實驗の結果を得たるものあるは既に周知の事實である(2)又 F. Giese は彼の解する經濟心理學の二途の內、經營要素としての人間を經濟生活の諸條件に適應せしむるよりは、物的生產手段及び環境の狀態をして人間の一定の心理的本質に適應せしむる方が經濟生活上遙に重要であると見做してゐる。(3) 更に單調なる作業の問題に就いては、例へば O. Lipmann は、自動機械の發達に依つて此の問題を解決するか、若しくは單調なる勞働をして勞働者の經續的なる注意力の緊張を要せず、且つ又注意の放散に依りて生產物に不出來を生せしめず、或はかの勞働者自身をして又は他人をして災害に陷らしめざる樣作業を構成するに努むべきであると述べてゐる。(4)

是等は正常なる勞働條件の下に於て勞働者に及ぼす影響として吾々の考慮すべき一二の問題に過ぎないが、吾々は更に現實に下つて勞働者が事實如何なる狀態の下に作業に從事せしめられつゝあるかを顧慮する必要がある。雇主は勞働時間若しくは仕事の强度を決定するに當つて勞働者を過勞に陷らしむるや否やに關しては無考慮に過ぎ、從つて往々勞働者の生命を短縮するの結果を生ぜしめ、又仕事は單調なることには頓着なく計畫され分割され勝ちであり、而して勞働者は單に低廉なる賃銀に關し、更に唯だ生產力の點にのみ關して雇傭せられ、彼等が結局其の仕事に適任なるや否やは考慮せられない。或は又作業場の衛生狀態、勞働者の訓練其の他の狀態は啻に化學的な若しくは機械的な過程に於て彼等が果して成功するや否やを考慮する丈けで決せられ、彼等の興味を喚起する可能性に關しては殆んど考へられてゐない。(5) 而して斯くの如き狀態が事實若し吾國の多くの工

場に於て見得る所であるとするならば、吾々は勞働科學の研究が吾國に取つて一層必要であり、且つ望ましきことを認めねばならぬ。

從來經濟學者は勞働の苦痛を論ずること屢〻である。彼等の論ずる所に從へば、今日の產業組織の下に於ては勞働は一個の商品であり、勞働者は日常生活の壓迫から資本家に對して自己の勞働を賣り渡さねばならぬ。而して一度買入れられたる勞働は資本家の支配の下に單に執務的な機械的な勞働に向けられる。かくの如き勞働に本來內在的目的が存せず、從つて又勞働者に創意と創作の喜悅とを期待することは出來ぬ。勞働科學の研究者が是等の點から時に重要なる暗示を受くることあるは事實である。乍然、勞働科學は其れ自身の研究に依つて勞働者の資本家に對する隷屬から生ずる社會問題を解決することは出來ぬ。然かも勞働科學は社會組織の如何を問はず、それから離れて尙ほ生產勞働に伴ひ來る所謂勞働の苦痛を輕減し若しくは除去するために其の研究を進めねばならない。かくて勞働科學は「歷史あつて以來絕へず憧憬されて曾つて實現されない人類の理想である」所の「勞働の苦痛からの解放」(6)のために自己の道を開拓せなければならぬ。

(1) O. Lipmann, Grundris der Arbeitswiss. S. I.
(2) 本誌　第二十一卷　第十號　一二六頁（拙稿參照）
(3) F. Giese, Methoden der Wirtschaftspsychologie, 1927. S 45
(4) O. Lipmann, Gründriss der Arbeitswiss. S. 10
(5) P. S. Florence, Economics of Fatigue & Unrest, p. 62.
(6) 小泉敎授著　社會問題研究（改訂版）四〇三—四〇四頁、（昭和三年四月十九日稿）

舊大陸に歸りたる新人の活躍

——一八三〇—一八三七年時代のリスト——

山田正夫

一

一八三〇年十二月二十日 List は嘗て合衆國に渡航の折船出した Havre の港に上陸して、六年振りで歐羅巴大陸の土を踏んだ。

彼が逃避して合衆國に在りし五箇年の間に、歐洲の天地は如何なる變革を閲したであらうか。十二月二十一日附の日記に彼は記して曰ふ『余の旅行中に寄せられたる餘多の報導は、極めて注目に値すべきものがある。波蘭は獨立を宣言し、瑞西の諸郡は、或は聲明に依り、或は干戈に訴へ、以て彼等が古き憲法を倒壞せしめた。……余は全歐羅巴が六箇月以內に燃え上るべきことを確信するものである』。(一)と。併しながら巴里に赴くや、彼は大陸の情勢が決して風聞乃至新聞紙等の報ずるが如く急なるものに非ざることを知り、却つて事の意外に驚いたのであつた。佛蘭西の首府は依然として古き衣を纏ひ、平穩の裡に安座して居つた。List の眼に映じた歐羅巴は、たとひ表面上だけは可成り變化した姿を見せて居ても、その實彼が嘗て生活したことのある社會と些も異る所はなか